

活用編

活用編では、周辺景観と調和した色彩計画の考え方について解説しています。建築物等の立地や視認距離、配色、素材による色彩の見え方の違いや景域ごとの色彩配慮事項などを紹介しています。

01	東京の景観と色彩	36
02	色彩基準の主旨をふまえた色彩計画の進め方	38
03	建築物の色彩…多様な見え方への配慮	40
04	遠・中・近景に対応した色彩計画	44
05	色彩基準の運用にあたって	53



東京の景観と色彩

景観色彩ガイドライン策定後の動向

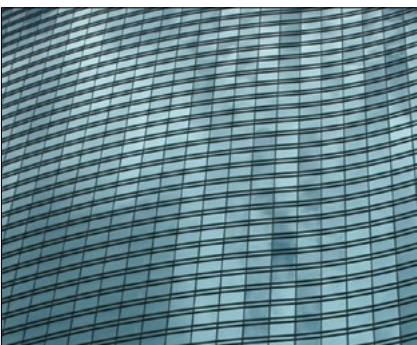


開発が進行する湾岸部の景観



丸の内内のオフィスビル群

色彩の協議調整にあたっての課題



超高層ビルの外装に用いられたガラス



多様な外装材によって構成される建築物の外観

●変化し続ける東京の景観

社会経済情勢の変化に伴い、都心部や湾岸部、拠点駅周辺などでは大規模な都市再編が進行し、建築技術の進展も相まって建築物の高層化が加速しています。

また、郊外では大規模な共同住宅の建設や既存の住宅団地等における建築物の大規模修繕や建替えが各所で進められています。

●景観協議の普及

東京都では、景観法、景観条例に基づく制度として、届出や大規模建築物等の事前協議を実施し、美しく風格のある景観形成を実現するための誘導を行っています。

また、都内の区市の中には、景観行政団体に移行し、独自の景観計画を運用する自治体も増えています。多くの区市では独自の事前協議制度を設け、各地域にふさわしい景観の実現に向けた誘導を行っています。

このように、景観形成にかかる制度が都内の幅広い地域に普及する中で、景観に与える影響の大きい「色彩」については、数値基準への適合だけでなく、地域の特性をいかした、調和のとれた街並み景観の形成が期待されます。

●多様化する外装材

社会状況の変化や建築技術の進展により、建築物に用いられる外装材や色彩は多様化しています。

特に、光沢や反射、透過などの光学的現象を伴うガラスや金属などの外装材の多様化が進み、景観への影響が予測しにくい場合があります。

●目的化する数値基準への適合

色彩については、マンセル表色系を尺度とした数値基準が設定されていることから、これらへの適合が目的化され、景観計画本来の主旨である周辺との調和に基づく良好な景観の実現がないがしろになっている事例も見られます。

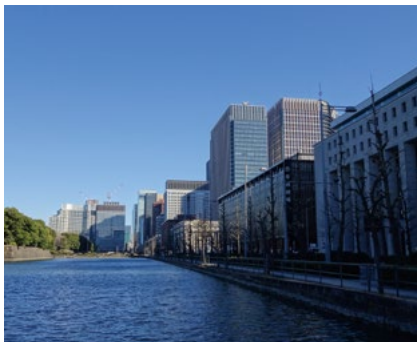
特に、色彩や外装材について事業者独自の設計指針や仕様により計画されている場合などは、周辺との調和が図られた外観とはなりにくい例も見られます。

●景観計画等の主旨の実現

景観計画は、「美しく風格のある首都東京の実現」を目的として策定されており、建築物の色彩についてもその実現が期待されています。

色彩の数値基準を満たすことはもとより、建築物の立地や規模、外装材の特性などを的確に捉えた、美しく周辺景観になじむ建築物の外観の実現が望まれます。

色彩基準の考え方



皇居周辺の品格ある街並み

●現況調査と立地特性に基づく数値基準の設定

景観計画では、景観計画に定めた区域ごとに色彩の数値基準を定めています。

これらの数値基準は、建築物の色彩使用状況をふまえて、各区域の景観を特徴づけている自然景観要素や歴史的・文化的景観要素などの資源を考慮して定めています。

建築物は、長くその地域にありつづけることから、街並み景観の秩序を大きく乱すような派手な色彩を避けるほか、明るく開放的な景観が期待される臨海部等では暗い印象の低明度色を避け、豊かなみどりとの融和が期待される丘陵地等では緑からの突出感が大きい高明度色を避けるなど、立地特性との関わりの中で、大面積での使用を避けるべき色彩を検討し定めています。

●ネガティブチェックを超えて…期待される場所の魅力を高める工夫

このように数値基準は、立地特性を加味して定めた、著しく景観から突出する色彩を避けるためのネガティブチェック型の基準といえます。

基準の数値を満たすことにより、極端な不調和は避けることができますが、それぞれの敷地がもつ特性や蓄積をふまえ、魅力ある景観を形成するためには、場所に応じた個別の検討が必要になります。

数値基準を満たすことはもとより、周囲の景観や建築物の規模に応じた遠・中・近景における色彩のあり方、建築物の魅力や風格を高める材料選定のあり方などを十分に検討し、個々の建築物だけでなく周辺の景観を含めて街並みの魅力を高めていく視点が重要です。

●活用編の目的

景観計画における景観形成基準は、色彩の数値基準への適合だけでなく、「周辺景観との調和を図ること」をあわせて一体の基準としています。

この活用編は、景観計画の実効性を高め、より魅力ある東京の都市景観を創造するために、「周辺環境と建築物の外装色の良好な関係性のつくり方」を色彩の観点から解説したものです。

時代と共に建築物の設計手法やその評価は変化し、街並みに影響を与え、事業者にとっては商品としての側面も併せ持つ建築物の計画や設計は、市場経済に大きく影響されます。こうした社会情勢をふまえた上で、景観の形成は民間・行政・都民が力を合わせ、都市の魅力ある景観を創造する責務を担っているということを意識し、協働することが求められています。

本冊子の活用により、街並み全体の質を高める観点で建築計画を行っていただくようお願いします。

02

色彩基準の主旨をふまえた色彩計画の進め方

色彩基準の主旨とそれに沿った色彩配慮の必要性

本項目では、個々の立地を見極め、中景、遠景、近景に配慮した色彩計画を進めていただくために、それぞれの景域における色彩の配慮事項やポイントを整理します。

事業の種別	立地	配慮を要する主な景観要素				近景(景観の蓄積) 周辺の街並み
		中景・遠景(景観の骨格)		歴史的資源・ 風致	緑	
		水辺 海	河川			
大規模建築物等	眺望4建築周辺			◎	○	
	文化財庭園等の周辺から1kmの範囲			◎	◎	
	水辺景観形成特別地区	◎	○		○	
	皇居周辺の景観誘導区域			◎	◎	
	その他の区域				○	
景観形成特別地区	文化財庭園等景観形成特別地区			◎	◎	
	水辺景観形成特別地区	◎			○	
	小笠原(父島二見港周辺)	◎			◎	◎
景観基本軸	臨海	◎	○		○	
	河川系(隅田川、神田川)		◎	○	◎	
	緑地系(玉川上水、国分寺崖線、丘陵地)			○	◎	
一般区域	東京湾ウォーターフロント活性化ゾーン	◎		○	○	
	センター・コア再生ゾーン				○	
	都市環境再生ゾーン				○	
	核都市広域連携ゾーン				○	
	自然環境保全・活用ゾーン				◎	

色彩基準の設定主旨

景観の秩序や品格を保全する彩度の抑制

立地特性や配慮を要する景観資源等の状況に合わせて、高彩度色や中彩度色の使用を避けます。

景観要素との対比を抑える明度の抑制

開放的な景観を形成するため、主に低明度色の使用を避けます。

落ち着いた風格のある景観を形成するため、極端な高明度色・低明度色の使用を避けます。

周辺の状況をふまえ、突出感や圧迫感のある明度域の使用を避けます。

○：配慮を要する
◎：特に配慮を要する

色彩基準の設定主旨

色彩基準の遵守

色彩基準設定の主旨

景域ごとの色彩配慮事項

東京都景観計画・景観色彩ガイドライン(基準編)

- 東京都景観計画では、事業の種別や立地をふまえ、建築物の外観等について、定量的な数値基準を定めるとともに、定性的な基準として周辺への調和を求めています。
- 該当する行為を行う際には、これらの基準を遵守する必要があります。

活用編

- 色彩にかかる数値基準は、都内の景観の実態調査に基づき、建築物の色彩の使用状況とそれらが立地する場所の特性をふまえて設定しています。
- 建築物等の色彩を計画する際には、数値基準の遵守はもとより、基準設定の主旨をふまえ、個々の建築物とともに周辺を含む街並み景観の充実を考慮した色使いが必要です。
- 東京都では、建築物等の外観について、主に遠景、中景、近景の視点から、それぞれの影響範囲の中での景観配慮を求めています。

個々の立地を見極め、遠景や中景(景観の骨格となる自然や歴史)、近景(地域が連携して蓄積してきた場所の特性)に配慮する。

遠景

色彩の見え方

遠景からは、周囲の景観とともに建築物の全体像やシルエットが感じられます。色彩について、個々の配色や材料の質感までは確認しにくいですが、全体の雰囲気や周囲・背景などとの対比（特に明度対比）などが強く意識されます。

色彩計画のための立地特性の確認

水辺の開けた立地、緑豊かな立地など、計画対象をとりまく骨格的な景観を確認し、その中におけるボリュームや色彩の良好な収め方を検討します。

色彩や素材の検討

計画対象と周辺の骨格的な景観の関わり中で、違和感や対比感の少ない色彩の方向性（大まかな色相、明度、彩度）を検討します。

中景

色彩の見え方

中景からは、建築物の形態的なデザインと色彩の使い分けや配置関係などが意識されます。形態と色彩との適切な連携や、使用する色彩相互の調和が大切な視点になります。また、周辺との関係の中では、スケール感の調和や立地特性に応じた適切な色相、色調の選択がなされているかどうかが大切です。

色彩計画のための立地特性の確認

計画地周辺の街並みとの調和を図るため、建物用途や規模、使用されている色彩などを確認し、街並みの特性の中での計画対象のあり方を検討します。

色彩や素材の検討

基調となる色彩を検討するとともに、周辺の街並みに調和する外観の分節方法や各部に用いる色彩など、外観の基本デザインを計画します。

近景

色彩の見え方

近景からは、建築物の全体像は捉えにくくなりますが、使用している材料表面の質感や光沢感、きめや斑、経年変化などが感じられ、建築物の素材感や管理状態などが意識されるようになります。また、屋外広告物やサイン、ディスプレイなど建築物に表出するアクティビティも意識されます。

色彩計画のための立地特性の確認

街並みの中でも特に目線に近い低層部の調和を図るため、近接する建築物の色彩や素材及びその用いられ方などを確認します。

色彩や素材の検討

各部の色彩や素材を絞り込み、景観シミュレーションなどを通して周囲の街並みとの調和や連携などを確認し、外観デザインを決定します。

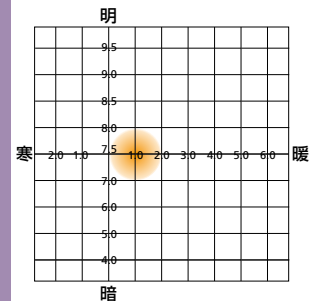
都市計画提案段階など

都市計画提案段階など

デザイン方針、配置図、パース等を通して景観づくりのコンセプトを確認します。

色彩や素材については、色相や明度、彩度のイメージと基調となる外装材のイメージをパースや着彩立面図などで確認・協議します。

また、基本色としての使用を想定する色域については、下のようなマトリクス図で示すなどの方法が考えられます。



暖色系色相・明度 7.5 程度、彩度 1.0 程度を想定する場合の表し方

実施設計段階など

計画の進捗にあわせて実施

計画の進捗や社会経済情勢など、計画をとりまく諸条件の変動をふまえて、精緻化したパース等を用いて遠景、中景、近景における計画対象の収まりを確認します。

色彩については、立面図にマンセル値を記載し、具体的な色彩について確認・協議します。

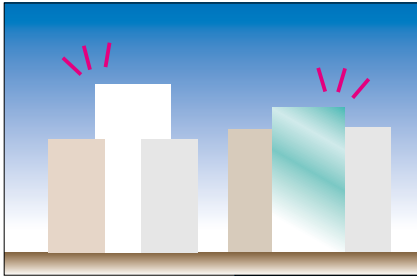
ガラスや石材、金属板、タイルなどは材質感やつや、反射の程度などが、景観に大きな影響を与えることから、実物のサンプルを提示するなど、完成時のイメージを共有できるような協議の工夫が考えられます。

周辺景観による見え方の違い——立地をふまえた色彩の検討

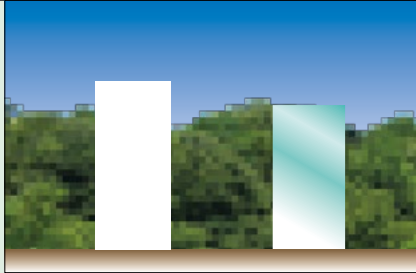
個別の建築物の色彩検討にあたっては、数値基準の充足だけでなく、近接する景観要素との調和を含めたより丁寧な調整が必要になります。

●都市化された立地と自然の豊かな立地

同じ色彩や材料でも周囲がビル群の場合と緑地の場合とでは見え方や感じ方が異なります。特に人工的な印象の強いガラスや金属、自然の緑との対比が強い高明度色の見え方などに大きな違いが生じます。

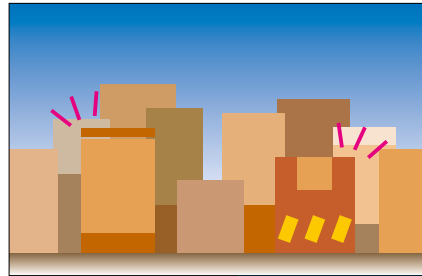


豊かな緑に囲まれた立地では、極端に明るい色や光を強く反射するガラスなどを基調とすることを避けましょう。



●商業地と住宅地

同じ色彩や材料でも周囲に多様な色彩が見られる商業地と落ち着いた色彩が連続する住宅地とでは見え方や感じ方が異なります。商業地では活気や華やかさの表現に適切なアクセント色等も住宅地では過剰になる場合があります。



住宅主体の街並みでは落ち着いた色調を基本とし、個を強調するようなアクセント色などはよく精査して用いましょう。

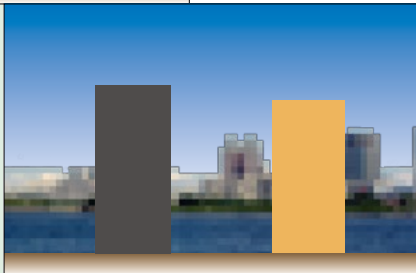


●密集市街地と水辺

周辺に建築物が集積した密集地では、建築物の全体像は見えにくいものですが、水辺など開放感のある立地では全体像が見え、周囲は明るい空や水辺が主体となることから、特に明度についての見え方や感じ方が異なります。



水辺の立地では、開放感のある景観を妨げないよう暗い色彩や色味の強い色彩を基調とすることは避けましょう。

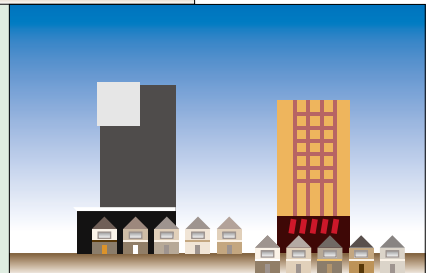


●高層化された立地と低層主体の立地

高層化が進んだ立地と戸建て住宅など低層建築物が主体の立地では、色の見える場所やそれが与える心理的影響が異なります。特に、高い位置に用いられる色彩については、圧迫感や閉鎖感を与える場合があります。



大規模な建築物を周辺環境と調和させるために分節化自体は効果的ですが、対比には十分な留意が必要です。



視認距離による見え方の違い——視認距離を意識した色彩と素材の検討

マンセル値による色彩基準は、建築仕上げ材の表面色を適用対象として設定していますが、同じ色彩でも視認距離によって見え方や感じ方が異なります。数値基準を満たすことはもとより、建築物の規模をふまえ、周辺への影響を考慮することが大切です。



遠景レベルの視点距離からの建築物の見え方

●遠景

- ・遠景からは、周囲の景観とともに建築物の全体像やシルエットが感じられます。
- ・色彩について、個々の配色や材料の質感までは確認しにくいですが、全体の雰囲気や周囲・背景などとの対比（特に明度対比）などが強く意識されます。



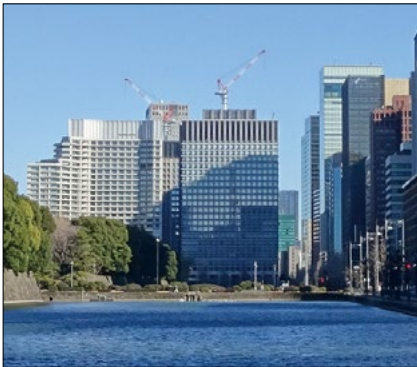
建築物の全体像、シルエットを整える
周囲の景観と雰囲気を合わせる
周囲、背景との明度対比を緩和する

●中景

- ・中景からは、建築物の形態的なデザインと色彩の使い分けや配置関係などが意識されます。形態と色彩との適切な連携や、使用する色彩相互の調和が大切な視点になります。
- ・また、周辺との関係の中では、スケール感の調和や立地特性に応じた適切な色相、色調の選択がなされているかが大切です。



形態と色彩の適切な連携を考える
使用する色彩相互の調和を図る
周囲に合わせたスケール感の創出を考える
場所に合った適切な色相、色調を選択する



中景レベルの視点距離からの建築物の見え方

●近景

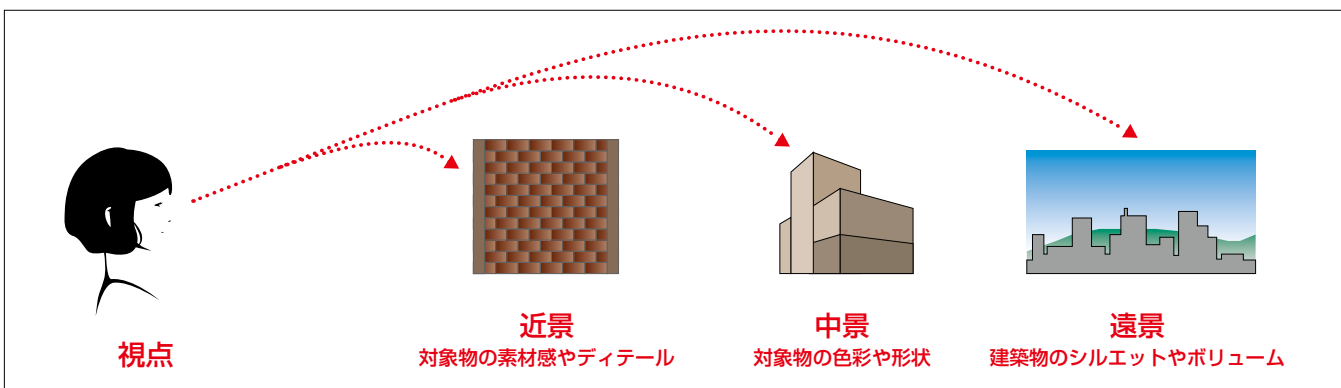
- ・近景からは、建築物の全体像は捉えにくくなりますが、使用している材料表面の質感や光沢感、きめや斑、経年変化などが感じられ、建築物の素材感や管理状態などが意識されるようになります。
- ・また、屋外広告物やサイン、ディスプレイなど建築物に表出するアクティビティも意識されます。



部位に合わせた適切な材料を用いる
材料の質感や耐久性などを考える
建築物に付帯する広告物、サイン等の収まりを考える

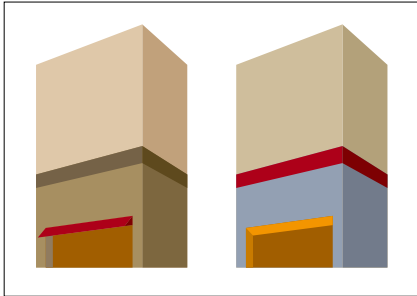


近景レベルの視点距離からの建築物の見え方



配色による見え方の違い——色彩の組み合わせや配置方法の検討

建築物は規模が大きく、数多くの部位・部材によって構成されます。また、同じ色彩でも用いる場所や配置関係、周囲の色との調和などによって印象が異なります。部位、部材、規模、立地など、それぞれの条件をふまえた適切な組み合わせによって、違和感の少ない外観を形成することが大切です。



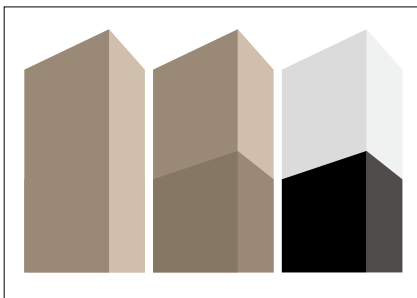
暖色系色相の低彩度色を組み合わせた配色は自然に見えますが、多様な色相に渡る複数を組み合わせた配色は不統一な印象を与えます。

●色相の組み合わせ

- ・都市には多様な規模や用途の建築物がありますが、多くの建築物は暖色系色相の低彩度色を基調としています。
- ・周辺との調和を図る視点から、建築物の基本となる部位については、色相の幅を大きく広げず、暖色系色相の範囲を基本とし、暖色以外の色相は、建築物のイメージを印象づけるような小さな部位で用いることが効果的です。



ほとんどの建築物が暖色系色相の低彩度色であることを意識する
複数の配色の基本は、共通・類似色相による
暖色以外の色相はアクセントなどの小さな部位で用いる



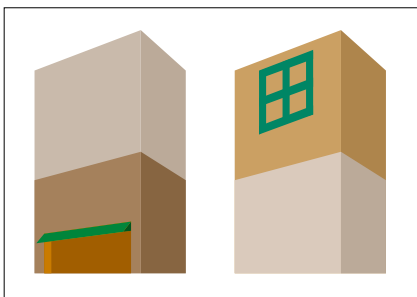
適切な明度差による配色は、外観の分節化やきめ細かい色彩デザインを行う上で効果的ですが、対比が強くなりすぎると個の主張が強くなりすぎます。

●明度の組み合わせ

- ・マンセル表色系による色彩の表記においては、明度差1の色差は彩度や色相の2倍の色差に相当します。そのため、建築物の外観を整える上で適切な明度差を設定することが大切になります。
- ・明度差が小さくなる場合は質感や陰影などによる効果を組み合わせると適度な変化をつくることができます。また、明度差が大きくなる場合は外観全体の主張が強くなりますので、明度差の緩和が必要です。



適切な明度差を検討・設定する
明度差が小さい場合：質感や陰影による変化の付け方を検討する
明度差が大きい場合：過度の主張とならないよう明度差の緩和を検討する



人の目線に近い低層部に華やかな色彩を用いたデザインは自然に見えますが、遠くからも目を引くような高い位置のアクセントは自己主張が強く感じられます。

●彩度の組み合わせ

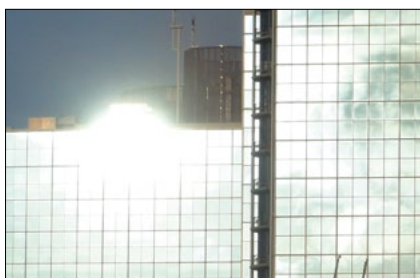
- ・彩度は、色の目立ち方に大きな影響を与えます。
- ・低層階やアクセントなど、歩行者や車両等からの意識を集中させたい場所にはより彩度の高い色彩を用い、高層階や外壁の基調となり、街並みの連続性をつくる場所にはより落ち着いた色彩を用いると、建築物の機能や部位と誘目性の強弱が連携した、自然でバランスのよい外観になります。



建築物の立地や規模に応じた彩度域を用いる
誘目性を高めたい場所：より彩度の高い色彩を配置する
全体のベースとなる場所：より彩度を抑えた色彩を配置する

素材による見え方の違い——素材特性を踏まえた色彩の検討

視覚の三要素として、形態、色彩、素材感が挙げられます。特に、色彩と素材感は建築物の表層を形成する要素として相互に関わりが深く、マンセル値では同じように表現される色彩が、その素材感によって大きく印象を変えることがあります。



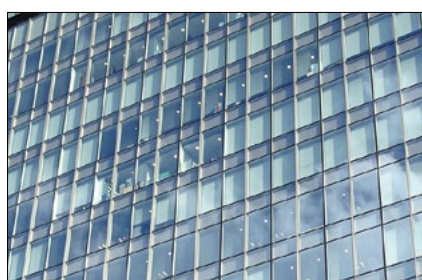
色味の強い熱反射ガラスの反射光

●光沢、反射

- ・同じ色彩でも、光沢が少なく見え方が変化しにくい材料はより落ち着いて、光沢や反射が強く周囲の環境変化に対応して大きく様相を変える材料はより強く存在を強調するような印象に感じられます。
- ・また、青系や緑系など色味の強いガラスの場合、光の反射により周囲の環境全体が色づいて見えるなどの影響も生じます。



過度の光沢や反射に留意する



外観に影響を与えるガラス内部の色彩要素

●透過

- ・ガラスやプラスチックなどの建材は光とともに視線を透過するため、周辺環境や建築物との見合いの関係を整理して材料を選定することが大切です。
- ・透過性の高い材料を多用することにより、外部だけでなく内部の環境が景観として意識されることとなります。
- ・バルコニー内部や窓辺を構成するインテリアの色彩についても十分な検討が必要です。



ガラスの背後にある内部環境も景観として捉える
視線の相互干渉を意識する



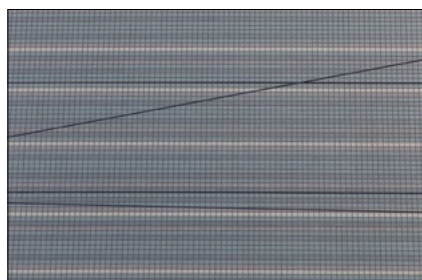
建築物の個性や特徴を強く印象づける自然素材

●テクスチャー

- ・同じ色彩でも、表面が平滑な材料にはプレーンな印象があり、表面の凹凸や陰影、斑などが大きい材料には個性や特徴を印象づける効果があります。
- ・石材や木材など建材として長い歴史のある自然素材やレンガをはじめとする焼き物素材などには風合い豊かなテクスチャーが存在することから、人の目線に近い位置で質感が感じられる材料を用いると、落ち着きや安定感のある表現になります。



場所に合った適切なテクスチャーの使い分けを検討する



複数の低彩度色をストライプ状に組み合わせたタイル

●地模様・パターン

- ・複数列色を組み合わせたモザイクタイルや規則的に穿孔が配置されたパンチングメタル、コテによって表情付けされた塗り壁材など、中遠景からは意識されにくいものの、近景レベルで豊かな表情をつくり出している材料も数多く存在します。
- ・一方、これらの中には色差が大きくちぐはぐな印象を与えるものや、影の影響により必要以上に暗く感じられるもの等も見られます。



建築物の表情を整える
色彩の相互関係や影の影響を考慮する